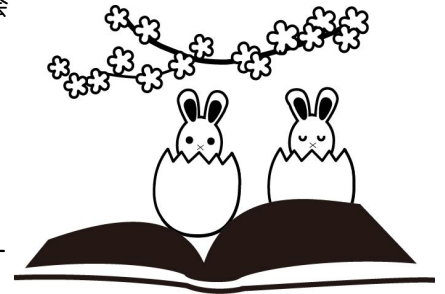


☆☆図書室だより☆☆ ☆第28号☆
☆☆ー 図書委員会よりお知らせ ー☆☆



2017年11月(後期)～2018年 3月(前期) 新規登録書籍をご案内します

書名 (購入書)	著者名など	出版社	分類
わが神、わが神 受難と復活の説教 日本の説教者たちの言葉	加藤常昭 編	日本キリスト教団出版局	[緑 194 Ka]
大村勇先生、左近淑先生の説教もあり、編者による解説には阿佐ヶ谷教会の歴史にも触れています。			

聖書と説教 バルト・セレクション1	カール・バルト 著 天野 有 編訳	新教出版社	[赤 191.9 Ba]
復活祭説教「私は生きている、そして、君たちも生きるであろう」、「不死性」など、わかりやすく読めるハンディな文庫本 (聖書より軽いです!)。			

書名 (ご寄贈書)	著者名など	出版社	分類
教会生活ハンドブック	古屋治雄 著	日本キリスト教団出版局	[赤 190 Fu]
神と人間のドラマ	創世記25章～36章による説教 松本敏之 著	キリスト新聞社	[橙 193.2 Ma]

(裏へつづく)

『イースター・ブック』 マルティン・ルター 著 R.ベイントン 編 新教出版社 [緑 198.34 Lu]



加藤 真衣子 元阿佐ヶ谷教会副牧師

「1 エルサレムへの旅と聖週」に二十二の説教、「2 聖餐」に十五の講演、「3 捕縛と裁判」に六つの説教、「4 十字架の刑」に九つの説教、「5 復活」に五つの説教がおさめられています。

ルターは特にヨハネによる福音書の説教に力を注いだといわれます。この本の中におさめられているヨハネ福音書の説教は次です。「宮潔め」「あなたがたは心を騒がせないがよい」「神を信じ、またわたしを信じなさい」「神の宮」「神はこの世を愛して下さった」「わたしの平安をあなたがたに与える」「慰め主が...くだるとき」「あなたがたもあかしをするのである」「わたしに問うこと」「わたしは自分の羊を知っている」「弟子たちの足を洗う」「ゲツセマネ」「アンナスの前での裁きとペテロの否認」「ピラトの前における裁判」「十字架の刑」「ヨセフの庭園で」。

主の十字架と復活がわたしたちのためであったことを、ルターの講解によって深められます。「死はわたしを攻めます。しかしわたしは死人のうちからよみがえりたもうキリストをもっています。ですからわたしもよみがえるでしょう。わたしは、この信仰に依り頼みます」。ルターの言葉にアーメン！



(神学生の鑑賞文より) ○ ○

宗教改革のルターが熱く語った説教集です。なるほどと感じます。教皇や教皇主義者に対する非難や聖餐についての説明が、独特と思わされます。カトリックとの戦いの時代です。プロテスタントの領地の外ならルターの命が危ないという時代でした。また、天使や悪魔が戦っているという世界観の時代です。聖餐はカトリックに近い考え方なのです。

しゅろの日曜日では、「主はこられます。...主があなたをお求めになるのです。...あなたの信仰もあなたからではなく、主から来ます (p.6)。」復活の主がマグダラのマリヤに向かっていわれた言葉について、「『兄弟』たちのもとに行っていいなさいといわれたと聞いて、彼らの心は喜びにおどったことでしょう (p.112)。」ヨハネ20：17に「兄弟」とあることに気がつきませんでした。エマオへの旅では、「何とこまやかな心づかいをもって...ひたすらともに歩まれた (p.114)」キラリと光り、感激されるところも多い本です。(神学生 A.H)

(つづき ↓)

書名 (購入書)	著者名など	出版社	分類シール
ATD 旧約聖書註解 2 出エジプト記	マルティン・ノート 木幡藤子 他	ATD・NTD聖書註解刊行会	[黄 193.21 A 2]
書名 (ご寄贈書)	著者名など	出版社	分類シール
日本聖書協会「宗教改革500年記念ウィーク」講演集	HM・バルト 他著	日本聖書協会	[橙 193 Ni]
NTJ 新約聖書注解 ガラテヤ書簡	浅野淳博 著	日本キリスト教団出版局	[黄 193.71 N]

＊ ＊ 『信徒の友』バックナンバー』のご案内 ＊ ＊

「死は勝利にのまれてしまった 復活のうた 希望のうた」



…『信徒の友』1987年4月号 特集より

大宮 溥

メサイアの「門よ、こうべをあげよ……栄光の王がはられる（詩篇24:7）」の復活の告知、「復活節の哄笑（こうしょう）」というユーモア、などなど、愛する溥先生の恒例盛りだくさんのメッセージがこの時代にも載っています。

『信徒の友』バックナンバーは阿佐ヶ谷教会を含め身近な教会の記事が懐かしく読めます。現在（スペースの都合上）棚の奥にあるので閲覧ご希望の方は図書委員まで。

(教会員の鑑賞文より)



『天の窓 ひとりの女医の記録』

林湘琴 著

こずえ

[黒 289.2 Ri]

1922年日本統治下の台湾の医師家庭に娘が生まれました。名は林湘琴。彼女の祖父は猟中負傷し、英国人の宣教師・医師であるマクスウェルに救われ、医師となり熱心なクリスチャンとなりました。それを聞いた湘琴も医師の道を志し、第二次大戦の最中、来日し東京女子医専にて医師となります。その後台湾に戻り一人の若い牧師と出会い結婚。夫婦は、大戦後の中国政府統治下でのさまざまな圧力や危機に直面しながら、台湾沿岸部で無料医療伝道団を設立するなど、台湾での医療伝道に励みます。その後二人は、アジア福音戦教会宣教師として来日し和歌山県高野山や静岡県榛原郡で日本の僻地伝道、僻地医療に尽力しました。

この本は、彼女の信仰生活と医療伝道の軌跡を綴った自叙伝です。様々な困難に出会っても疑うことなく神を信じ続ければ、必ず助けが与えられることを、彼女はその生涯を通じて伝えてくれます。
(地の塩会 Y.W)



『三死一生 大村善永 自叙伝』

大村善永 著

[青 198.34 Oh]

本書は、神が三度、死の淵より蘇らせ、神の愛によって生かされ、神の愛を実践し、実現させた方の回想録であります。表紙のカバーを含めて、あとがきの次まで読むと、家族一丸となつて、編まれたことが分かります。

私は、本書に出会って三回読み返し、また今回これを書くに当たり、もう一度読んで、深い肝銘を受けました。点字で原稿を書き、奥様が清書されたものです。

もっと書きたかった事、伝えたかった事が多々ありましたでしょうが、常に淡々と語られ、簡潔な文体に終始していて、正に『行間を読むと察するに余りあり』とは、本書のような本を言うのではないだろうか、と思えてなりません。

日々、神と共に生き、聖句を具現化された方であったのだと、思いました。

(図書委員会 K.S)